

整備事例集 vol.18

令和5年度整備事例集



掲載事例 ①

私たちのまちを
私たちでつくる
きっとまちが好きになる



掲載事例 ②



掲載事例 ③

掲載事例

- ① 松見町みんなの実家「てんこもりのわ」プロジェクト(神奈川区)
- ② 「食」をきっかけとしたシェア空間の立ち上げ(磯子区)
- ③ 烏山ノスタルジア計画・町への愛着生む居場所を作る(港北区)

ふ-しん【普請】「普く請う(あまねくこう)」とも読み、「力を合わせて作業に従事すること」という意味が含まれています。

「公共」は行政によってのみ担われるものではなく、特に地域に根ざした身近な課題への対応などに市民の皆さんが主体的に関わることで、参加する人や地域に暮らす人々の満足感を高めることにつながっていきます。「まち普請」には、市民に身近な「まち」に「普請」の輪を広げていきたいという願いが込められています。

松見町みんなの実家「てんこもりわ」プロジェクト

多世代が集う地域の実家が育む町内家族

横浜駅から電車で10分かつらぶにアクセスできる妙蓮寺駅から徒歩圏内の松見町には、子育て世代が多く移り住んできています。しかし、馴染みのない土地での子育ては孤立しがちです。さらに松見町には横浜特有の坂が多くあり、坂道で子どもと重い物袋を抱えて自転車を押す汗だくの女性の姿をよくみかけます。

新しい住民が増えていく一方で、子どもの時からここで育ったという人も多くいる松見町は下町的な雰囲気があり、困っている人を見かけると「子どもはここで見ているから、荷物を先に置いておいで」「雨宿りしていい」と手を差し伸べるようなあたたかさがあります。自然と子どもを介したつながりが生まれ、子育てサークルも多く活動しています。

こうしたつながりから、「拠点があればママたちが息抜きできるね」「ここは町内会館からも遠いから、高齢者がお茶を飲める場所があればいいね」という声が出てきました。そこで、地域にあるシエ

アハウスの空いている昼間の時間帯を活用して、誰でも気軽に立ち寄ることができる週二回の地域の居場所「てんこもりのわ」ができました。子育ての愚痴を先輩ママが聞いたり、折り紙講師資格を持つているスタッフが子どもや高齢者に折り紙を教えたりして、自然に多世代交流が生まれていきます。「ここに来るとホッとします。実家みたい」と言われる場になりました。



中の様子が見えて入りやすくなった大きな玄関開口部

しかし利用者が増えると、今度はハード面の課題が気になります。利用しているのは古い住宅なので、すぐにドアが開かなくなったり、たくさん人が来ると靴の置き場がなかったり、手すりがない急な階段など、人が集まる場所としては問題が山積みです。「実家」と呼ぶ場所だったら食事は大事だけれど、台所が古いから調理も難しい。「やりたいことをする」は、ここでは無理なんじゃない？」とスタッフが拠点の閉鎖も考えたときに、ヨコハマ市民まち普請事業を知り、さっそく手をあげました。

「でも、申請がこんなに大変だなんて、まったく知らなかった」と話すのは代表の加山さん。「私たち、ほとんどパソコンもわからなかったから、応募申込書のダウンロード？どうやって？と頭を抱えた」そうです。しかし、困っていると誰かが手を差し伸べてくれるのが松見町。「書類は私がつくりますよ」という人が現れ書類をすべて作成してくれ、「設計会社

面の作成を担当してくれました。新たなつながりを得て、町内会のサポートもあり、見事にコンテストを勝ち抜きました。



壁紙や人工芝などは近所のパパたちの手も借りて整備した

整備によって一階が広くなったことで、子どもたちが走り回れるようになりました。ドアもスムーズに開くようになり、靴置き場も土間を広くとったことで解決。手すりがついたことで二階も活動場所として利用が可能になりました。週二回のオープンは変わりませんが、リニューアル前は近隣のほとんどの家にご挨拶に行ったり、イベントごとにチラシを配布することで、新たな人たちも訪れるようになりました。調理設備も充実したので、念願のランチの提供や子ども食堂もスタートし、それがまた人を呼んでいます。さらに、整備によって庭との連続性も生まれたので、ビアガーデンなどを開催することで地域に住む男性の利用も増えてきました。

また、利用者が増えることで新たな地域のニーズや連携の提案があり、事業も増えました。以前から取り組みたかった横浜市の「子育てサポートシステム」に参加したり、場所を探していたカメラマンが出張して子どもの写真をとってくれる「はだかっぽ撮影会」や、「お花を教えたい」という方を講師にしたお花教室もスタートしました。秋祭りでは地域のケーキ屋さん、お花屋さんも協力してくれ

て、充実した内容での開催ができました。



キッチンを改修したことで複数人での調理も可能になった。

一方で、想定を超える人数が集まり、景品が足りなくなってしまうこともありました。その他のイベントでも、チラシを配布すると「てんこもりのわ」に入れないくらい多くの人に来てしまうことがわかり、イベントの規模と広報のバランスをどうするかという悩みも出てきましたが、着実に地域の実家として根付いてきている証ともいえます。

さらに、神奈川大学、神奈川消防署と協力して防災マップづくり

も始まっています。これまで子育てや高齢者の見守りなどに取り組んできた「てんこもりのわ」ですが、いざという時にさらに助け合いの輪をひろげるために、次のステップに踏み出しています。

現在の「てんこもりのわ」の課題は、スタッフ全員が別に仕事を持っているため、週二回のオープンに限られていることです。将来的にはスタッフを増やして常設にしたい、そして、できれば「てん



間仕切りを撤去し土間も広くしたことで一度に多くの人が集えるようにもなった

こもりのわ」で働く人を置きたいと考えています。そのために収益化の方法を模索中です。

「悩みがあっても、ここにきて笑顔になって帰ってほしい」という「てんこもりのわ」の願いが、地域の老若男女をつなぎ、「てんこもり町内家族」を実現しつつあります。



松見町みんなの実家「てんこもりのわ」プロジェクト(神奈川県)
 整備主体……てんこもりのわ
 整備場所……神奈川県松見町3丁目940番8号
 整備内容……地域の居場所の玄関・開口部・間仕切り変更、授乳室・シャワー室、バリアフリー化
 竣工時間……令和6年2月

「食」をきっかけとしたシェア空間の立ち上げ

「まちにとってなくてはならない洋光台シェアベースは日々進化中」

洋光台駅近くの洋光台団地を中心に進められていた「団地の未来プロジェクト」をきっかけに、2019年に「まちまどー洋光台まちの窓口」は生まれました。地域情報を集めて発信し、地域住民からの相談対応や、人々のネットワークづくりなど、その名の通り「まちの窓口」の顔として活動してきたのが、青山さんと伊藤さんです。

「まちまどー」には行政の窓口に行く前の、ちょっとした相談がたくさん寄せられています。その中で多かったのが「お店を出してみたい」「食べ物に関わる仕事がしたい」という相談です。夢はあるけれど、いきなり店舗を構え



1階と2階それぞれが開いていて内部の階段で行き来するつくり

のは非常にハードルが高い。そこで二人は「まず試してみる場所があるといいのでは」と考え、シェアキッチンづくりに動き出します。しかし、「まちまどー」の拠点には調理設備がなかったため、調理設備と食事ができる場所を兼ね備えた場所を作ることを考えました。

そんな時にヨコハマ市民まち普請事業を知り、応募を決め、仲間たちと「シェアベース実行委員会」を結成してコンテストに臨みました。大変ではありましたが、多くの人の協力を得て、みんなで文化祭のように楽しむことで、コンテストを勝ち抜くことができました。

「でもコンテストって序章だったよね」「本当に大変だったのはその後だった」と、青山さんと伊藤さんは振り返ります。シェアキッチンとして営業をするためには多くの許可申請が必要でした。一階と二階に二つのスペースを設けたため、複数の許可申請が必要で、それぞれの役所の窓口との調整に苦労しました。さらには建築資材の価格高騰など、複数の想定外が重なり、8月に予定していたオープンが半年延びる事態になりました。また、オープン前にこの場所を貸すためのルールをつくることにも苦労しましたが、多くの方たちからのアドバイスもあり、前向きな気持ちは途切れることなく、無事、3月に食をテーマにしたシェア空間「シェアベース洋光台」を開設することができました。

シェアベースには一階と二階にそれぞれ調理設備がありますが、仕様を変えたことで、多様な使い方が可能です。オープン後は口コミで料理教室や一日カフェ、お菓子の製造、クッキー販売などに利用する人が増えてきました。オープンから半年を経過して、この場所を使って教室や販売の事業をする人よりも、ホームパーティに使う人が多いことがわかってきました。これは「まちまどー」で相談を受けてきた一人にとって想定外だったそうですが、自宅にない調理設備があり、くつろげる空間があるシェアベースならではの使い方です。

印象に残ったシェアベースでのイベントは、二階で高齢の女性た



内壁は下地剤塗りから、塗装までスタッフや地域住民に協力をしてもらい仕上げた



2階でジャム作り、1階ではスコーン作り。最後は一緒に試食

ちがジャムをつくり、一階で子育て世代がスコーンづくりを行ったことです。普段は接点がない両グループですが、しばらくすると高齢の女性たちは「スコーンを手作りするのははじめて見た。作り方を教えて」と聞き、子育て世代は「このジャム美味しい!どうやって作ればいいのですか?」と尋ね、自然に多世代交流がはじまったそうです。一階と二階の両方にキッチンがあり、内部の階段で行き来ができるシエアベースだからこそこのエピソードです。

洋光台は約50年前に造成されたまちで、住民の皆さんは自分たちがこのまちを担ってきたという自負を持っているそうです。

そのため、新しい取り組みにも寛容で、「まちまど」の二人はすぐ温かく見守られていると感じるそうです。「実際に手を差し伸べてくれる人も多いんです」と話す二人は、まち普請を通じて、多くの多様なサポーターが増えたことを実感しています。

そして、それを証明する出来事がおきました。「まちまど」の拠点の上階の一室で火災が発生し、消火作業の影響で「まちまど」はしばらく使用できなくなりました。一方でシエアベースは火元か

ら少し離れていたため被害は免れ、また出火が夜間だったため、お二人も直接的には被害を受けませんでした。それでも、おにぎりやお菓子などを持って「大変だったね」と顔を見にきて下さった方々がたくさんいて「これには驚いたし、嬉しかった」とのことです。お二人の存在がもう洋光台になくてはならないものと認められ、あたたかく見守られている証にもなりました。



月1ではじめた「まっちゃん まちまど」は甘味が完売するほど人気になっている

「まちまど」への相談も増え、まちや個人の話から、最近では「まち普請に申請しようと思う」という相談も寄せられるようになってい

した。他の地域から「シエアキッチンをつくるには、どうすればいいの?」という相談もあるそうです。

さらに、相談や情報発信に加え、実際に使っている様子を見てもらうために、興味のある方と繋がれる気軽に立ち寄れるカフェを月に一度始めました。地域のこだわりのお店とのコラボで始まったこのカフェは、さらにさまざまな人々のつながりを生んでいます。

洋光台に根付いた「まちまど」と「シエアベース洋光台」は、日々進化中です。



「食」をきっかけとした
シエア空間の立ち上げ（磯子区）
整備主体…まちまど・洋光台シエアベース実行委員会
整備場所…磯子区洋光台3丁目
洋光台中央団地 13-1107・207
整備内容…シエアキッチンの内装およびキッチン周りの設備
竣工時期…令和6年1月

鳥山ノスタルジア計画・町への愛着生む居場所を作る

地域連携ハブとして町を元気にする小さな拠点

小机駅近くの幹線道路沿い、日産スタジアムを背にして建つ小さな拠点が「町カフェ城郷ノスタルジア（以降、町カフェ）」です。一階は10人入るといっぱいになるカフェとインフォメーションセンター、二階にはイベントスペースと相談室があります。居心地はとても良いのですが、やっぱり少し狭い。でも「狭いからこそ全部ここでやるのではなく、ここが人とひと・人と町をつなげる『地域連携ハブ』となって地域を元気にする」というのが「町カフェ」の目標です。

運営団体である「一般社団法人居場所づくり濱なかま」代表理事の岩田さんは、ソーシャルワーカーとして地域の福祉ニーズに向き合ってきました。その中で「地域で豊かな人間関係を築くことで、年齢や障害の有無などに関係なく誰もが豊かな日常を送ることができるのでは」と考えるようになり、そのために、できるだけ多様なつながりがある地域をつくること、町内会や民生委員、

地区社会福祉協議会などと共に「鳥山居場所づくりプロジェクト」を立ち上げ、高齢者の交流の場づくりの活動をしていました。しかし、人や情報を循環させていくには日常的な拠点が必要だと考え、新たな場所づくりを模索していたときに、ヨコハマ市民まち普請事業のことを知りました。



1階をセットバックしてつくった屋外カウンターとインフォメーションセンターが特徴

「これは良い制度だ」と思ったのですが、まち普請を知ったのはなんと応募締め切り当日。岩田さんが急いで仲間に相談をしたところ、全員が「やろう」と賛同を示してくれました。そのまま勢いで申込をし「鳥山ノスタルジアプロジェクト」が誕生しました。これまで同じ思いで拠点のことを議論してきた仲間たちなので、それぞれ得意技をもちより見事コンテストを通過しました。

拠点のデザインは、町への愛着を生む場所になつてほしいと、地域の史跡「小机城址」にちなみ、城下町にあるカフェをイメージ。設計は過去にまち普請で整備を行った緑区のCoovaの代表でもある関口氏に依頼をしました。整備の過程では、できるだけ「ゴミを出さないように建物の廃材を活用してテーブルをつくったり、子どもたちと一緒に壁塗りワークショップを行いました。拠点の名称は、より広い地域でのつながりあいを目指すという意味を込めて、鳥山よりさらに広い地域を指

す「城郷」を入れました。こうして「町カフェ城郷ノスタルジア」が完成しました。一階のカフェの壁には、城郷の地域が一目でわかるマップが描かれています。



カフェのコーヒーテーブルは階段に使用されていた木材を再利用してDIY。踏板と蹴込板をはめ込んでいた跡がわかる

長い時間をかけて居場所について考えてきたことで、拠点の整備後には一挙に活動が花開きました。現在、「町カフェ」は週5日オープンし、毎日様々なイベントが行われています。午前中にスマホ教室、お昼にランチの会、午後には高齢者サロンというように一日で複数の集まりが催されることもありますが、どれも大盛況です。スマホ教室は特に人気があり、他にも健康チェックの会や音楽会も

開かれ、調理師免許を持つ岩田さんが腕をふるう日曜日のモーニングも始まりました。イベントカレンダーは毎月予定がぎっしり詰まっています。団体の活動の原点である高齢者サロンでは、拠点ができたことで新しい参加者が増えています。居場所ができるのを待ち望んでいた人がいかに多かったかがわかります。



カフェに城郷のマップがあることで、自然とまちのことが話題にあがる

カフェでは、コーヒーボランティアさんが淹れるこだわりのコーヒーが人気で、近所の人がゆったり過ごす場になりました。日産スタジアムでイベントがある時には、地域外からも多数のお客様さんが訪れたいへんな賑わいとなります。そんな日はボランティアさんが協力して乗り越えていきます。また、二階をギャラリーとし

て利用できるように追加で整備したところ、近隣にお住まいの方が「地域を描いた絵を地域のの人に見てほしい」と個展を開く事例も生まれました。その時も地域の方はもちろん遠方からもお客さんが多数訪問してくださり、近隣以外でも拠点のことが広く知られるようになってきました。

さらに11月には4日間にわたって「地域をめぐる城郷まちマルシェ」が開催されました。世界の雑貨販売からモルック体験会、体力測定や竹細工、古着交換など、地元の事業者や団体が集結し賑やかなイベントとなりました。会場となったのは「町カフェ」と隣のコンビニの店舗裏の空地。コンビニのオーナーはまち普請に挑戦しているときからの応援者で、マルシェの会場として空地の利用を相談したところ快諾してくれました。しかし空地は大人の背ほどの雑草が生え荒れていたため、地域の人たちに声をかけ一緒に草刈りをしました。いまではマルシェだけでなくモルックなどのイベントや交流ができるスペースとなっています。こうやって多様な人たちが緩やかにつながっています。

まち普請に取り組むときに行った、まちのアイデアを出し合う「城

郷フレスト」も引き続き開催しています。「このまちがこうなったらしいな」という意見が活発に交わされ、マルシェの内容もさらに充実しました。これも地域のことに基づき、考える人を増やす工夫の一つです。



2階ではギャラリー(左)やシニアサロン(右)のほかパン教室なども開催している



拠点がオープンしてからまだ半年ですが、岩田さんは「城郷のこ

とが好きだと言つ人が増えてきている」と手ごたえを感じています。その背景には、「町カフェ」がつかないできた事業者、地域団体、行政、そして地域住民の多様なネットワークがあります。まさに『地域連携ハブ』としての一步を踏み出しています。

岩田さんたちは「こういう拠点はひとつだけあっても全然足りない。地域のなかでハブとなる拠点を増やしていきたい」と大きな夢を語ります。それが夢ではなく未来が今から楽しみみです。



鳥山ノスタルジア計画・町への愛着生む
居場所を作る(港北区)
整備主体：町を故郷に・鳥山ノスタルジアプロジェクト
整備場所：港北区鳥山町 1013
整備内容：インフォメーションセンターを備えたカフェ
竣工時期：令和5年11月

「ヨコハマ市民まち普請事業」とは

市民の皆さんが主体となっていく、地域の課題解決や魅力向上のための施設整備を伴うまちづくりに対して、支援、助成を行う事業です。

施設整備のアイデア検討やコンテストへのチャレンジ、地域の方々との合意形成、整備への労力提供などの機会を通じて、地域コミュニティが活性化し、地域まちづくりの輪が広がることを目的としています。

コンテストの年度

整備の年度

自ら主体となって
生活環境の整備を
したい市民グループ

2月中旬～5月下旬
整備提案募集

ヨコハマ市民まち普請事業部会による選考
(学識経験者・まちづくり実践者・市民委員(公募))

7月
1次コンテスト
開催

9月
活動懇談会

1月
2次コンテスト
開催

市民自ら
整備・維持管理を実施
整備助成金として
最大500万円を交付

横浜市地域まちづくり推進委員会

ヨコハマ市民まち普請事業部会委員(令和4年度選考委員) ※所属は令和4年度時点

杉崎 和久(部会長)	法政大学法学部教授(都市計画、まちづくり)
朝比奈 ゆり	東京ボランティア・市民活動センター専門員(市民活動支援、みどり環境)
飯尾 友子	本牧山頂公園和田山地区愛護会会長(まちづくり、市民活動)
植松 満美子	市民委員(公募)
加藤 功甫	市民委員(公募)
川原 晋	東京都立大学都市環境学部教授(市民事業、観光まちづくり、都市デザイン)
後藤 智香子	東京大学先端科学技術研究センター特任講師(まちづくり、住環境、こども環境)
松村 正治	NPO法人よこはま里山研究所理事長(市民協働、環境社会学)

ヨコハマ市民まち普請 整備事例集 vol.18

令和5年度整備事例集

●発行 令和7年1月
横浜市都市整備局地域まちづくり課
〒231-0005 横浜市中区本町6丁目50-10
TEL 045-671-2679 FAX 045-663-8641

●編集・デザイン 横浜市住宅供給公社
●デザイン・印刷 株式会社佐藤印刷所

あちこち・ドキドキ・ハマのまち
都市整備局

「まち普請事業」についてはホームページをご覧ください。
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/>



Webで検索

Facebook「ヨコハマ市民まち普請ひろば」もご覧ください。
<https://www.facebook.com/yokohama.machibushin>



Webで検索